

## 老舍の《茶館》について

平 松 圭 子

### On “The Teahouse” (茶館) by Lao Shaw (老舍)

Keiko HIRAMATSU

#### ABSTRACT

“The Teahouse” is a drama published in July, 1957, in the first number of the “Shouhuo” (收穫), a literary magazine. Right after the Liberation, Lao Shaw created such dramas as “Fang Zhenzhu” (方珍珠) and “Longxu gou” (龍鬚溝), and glorified head-on the socialists revolution and the liberation of the people by describing the improvements made in the miserable lives of the poor, the liberation of female folk-art entertainers, and so on. Those dramas were written in the context of new China in its post-revolutionary period.

“The Teahouse” does not belong to that group his dramas. The time depicted in it is pre-revolutionary, and each of the three acts represents a different period, while on the stage remains the same teahouse where people exchange news of their time. In the teahouse, each set of the characters in the three acts presents before the audience three dark ages in China, and, eventually the liberation of Beijing (北京) by the Eighth Route Army (八路軍) is hinted at the end. However, the drama itself draws its curtain with such tragedies as the suicide of the teahouse master and the occupation the teahouse by the Guomindang (国民党) Army. Judging from the government’s literary policies at the time of the publication, the author seems to have run a considerable risk in producing the ending like this.

Before each act begins, shulaibao (数来宝) presents the audience the summary of the coming act, thus the technique of a traditional folk art being adopted into the modern drama. In 1956 Lao Shaw translated George Bernard Shaw’s “The Apple Cart” into Chinese. Shaw’s dramas sometimes accompany a long fore ord, and this is the case with the above drama. Preceding the drama and between the acts, Lao Shaw placed the traditional Shulaibao (数来宝) trying to fill the margin of time and, at the same time, to add a new scope to the form of the drama.

This manuscript is aimed at discussing the new techniques, Lao Shaw tried in “The Teahouse”.

#### 1.

《茶館》は老舍 (1899~1966) の戯曲の中で代表的傑作といわれる作品であり、1983 年、北京人民芸術劇院の来日公演により知る人も少なくないはずである。《茶館》は 1957 年 7 月文芸雑誌《收穫》創刊号に発表された。その後単行本であるいは《老舍劇作選》の中に入れられる等、何度も印に付され、公演も 1958 年、1963 年中国国内で上演されたが、好評を博したのは 1979 年の上演であった。その後スイスドイツフランスで公演が行われ、中国的ムードに観客は酔ったと伝えられている。

1946年老舎は米国國務省の招聘で米国各地で文化交流と講演を行ない、一年の予定を延長し滞在していたが、周恩来の帰国呼びかけを機に、1949年12月に北京に帰って来た。北京は老舎にとって生れ故郷であり青年時代まで育ち生活したなつかしい地である。そして1949年は10月1日中華人民共和国が成立したばかりであった。北京で多くの旧知と再会、新たに生れ変わりつつある北京に感動し、北京のあちこちを見学する。充分休養するまもなく、北京市文学芸術工作者代表大会の主席、中国民間文芸研究会副理事、盲人曲芸（げいのう）隊の組織等多忙な公務が始まる。そのかわり、《方珍珠》（5幕、1950）《竜鬚溝》（3幕、1950）を皮切りに解放された人々のよろこびを描く戯曲をつぎつぎに発表した。そのほか相声（まんざい）の台本、鼓詞（語り語り）等民間芸能、歌劇、随筆小論、講演と驚くほど精力的な活躍をしている。

帰国当初は日毎に改革されてゆく北京の情勢、新生社会についてゆくにはそれなりの驚きや困難があったはずである。だが、老舎は持前の勤勉さと粘り強さで新社会に順応し、生きてゆく力を養っていった。「悪らつなボスどもを告発する会」に参加し、子が父を告発するのを見て涙が出そうになるが、真理は何よりも大きな存在であり、父子の関係といえども真理をおおうことはできないと悟る<sup>注1)</sup>。このような解放以前には想像もしなかった新事象の体験、あるいは見聞をもとに戯曲を書いたのである。ただ《茶館》については製作の事情がちがっていた。次のように自ら語っている。

十年来、十数編の戯曲を書いてきた。そのうち《茶館》のほかはいずれも、この時代に発生したことである。北京政府が異臭を放つ竜鬚溝を埋立ててくると、私はそれを《竜鬚溝》に書きあげた。曲芸（民間芸能の語り語り）の役者が解放されれば私はそれを《方珍珠》に書いた。《春華秋実》《青年突撃隊》《西望長安》みな同様である。いずれも周辺に起きたことを書いたものである<sup>注2)</sup>。

では《茶館》が他の戯曲とことなる点はどこにあるのか。本稿では《茶館》に扱われている内容と、形式の面から探索したい。

## 2.

解放後の文学芸術は、社会主義国家建設に積極的な役割を果たすものでなければならない。新時代を反映し、新時代に生きる新しいタイプの人物像を描き、人民が歴史を推し進めるのを助ける役割を果たさなければならない。こうした建国路線にそって、人々を教育し楽しませる作品が要求された。老舎は帰国後毛沢東の文芸講話を読み、感激し、二十数年来の文筆活動を反省している。そして積極的に新社会に対する認識を深めるために学び、知り得たものを鼓詞や快板に作り新社会をほめたたえ、この作業をくり返すうちに戯曲にも筆をのぼし、《方珍珠》や《竜鬚溝》を書いたのであった<sup>注3)</sup>。新しい政治体制のもとで、文芸活動をするために非常な努力をしていたことは多くの小論からうかがわれる。

解放後の老舎の戯曲は大きく五種類に分けることができる。

1. 《方珍珠》 5幕 1950
- 《竜鬚溝》 3幕 1950

旧社会の陰惨さと新社会の変貌を対比して、人民大衆の新社会に対する愛情を描こ

うとした。

2. 《生 日》 1 幕 1952

《春華秋実》 3 幕 1953

三反運動，五反運動を反映。

3. 《西望長安》 5 幕 1956

身分履歴を詐称した李万銘の事件を諷刺。

4. 《紅大院》 3 幕 1958

《女店員》 3 幕 1959

《全家福》 3 幕 1961

大躍進政策下，北京の行動的な若者の姿を明るいタッチで描く。

5. 《茶 館》 3 幕 1957

《神 拳》 4 幕 1959

歴史的（過去の）題材をあつかう。

最初の戯曲が発表されてから《全家福》まで十年余の年月が過ぎているので、ひとまとめに概括するのは難があるが、1 から 4 はそれぞれの時期に見聞した新人新事（新しい道徳を身につけた人物，それらの人々によってなされた事）を正面から取りあげ素直に新しい社会を「歌頌」したのであった。ある外国人が，老舎は自分の書きたいと思う作品を書かず，もっぱら共産党の号令ばかり聞いて，追従者になってしまったといった。それに対して老舎は「私がもし追従者なら，その人らはでたらめな人間だ」ときめつけ<sup>注4)</sup>，旺盛な創作意欲を誇らしげに語る。

友人の中には，私がよく知っていることだけについて書け，もう少し筆を休めろと忠告してくれる人もないではない。しかし私にはその気はない。文学上の高い見地からではなく，やめたくてもやめられない感情なのだ。かりに「今日を心から愛する心情」といっておこう<sup>注5)</sup>。

これらの戯曲のうち 大部分の作品は北京を舞台にしているが，それは「老舎がよく知っている北京，その北京の変化を書け」という周恩来の忠告に従ったといわれている<sup>注6)</sup>。

### 3.

本稿で問題にしたいのは 5 に分類した《茶館》であるが，まず大まかな構成を紹介する必要がある。

#### 第 1 幕 (1898, 戊戌政変による維新運動失敗直後)

北京城内，裕泰茶館。主人の王利発はまだ若くてきびきびした動きでどの客にも愛想良い。人相見，キリスト教信者の有力者，女衞，妻にする女性を買いに来る宦官の長官，私服刑事，巡查，常連客の旗人松二爺と常四爺，松二爺は鳥籠を提げて小鳥の鳴声を楽しむという旗人の有閑趣味を象徴し，常四爺は幼い娘を売ろうとする貧婦にうどんを恵むやさしさをもつ剛直な人物。工場経営に情熱を注ぎ実業救国を唱える民族資本家の秦仲義。娘康順子を売る農夫，康順子は身売の相手が宦官の長と聞き昏倒する。常四爺は「大清国は亡ぶ」と口を滑らし，私服刑事に連行される。清朝末期の社

会の衰微した状況をこれらの登場者の短かい対話の中からうかがわせる。同時に、紛れこんだ銅鳩のことで起きた争い（銅い慣したたくさんの鳩を竹竿で指揮し群舞させるという趣味で、時間と費用のかかる遊び。故に一羽の鳩が他所へ紛れこみ返してもらえぬと争いになる）といった当時の風俗をも織りこんでいる。

第2幕（袁世凱死後の軍閥割拠内乱の時代。第1幕から十余年を隔つ）

同じく茶館。主人王利発の努力で裕泰は他の茶館が店じまいしたにも拘らず、営業を続けている。しかし店の奥半分は下宿屋にかえ、店内もモダンな装いに改めてある。店内を改良しても給料は改良されないとぼやく店員と主人のかけ引き。内乱による難民、店が続いているがために却って私服にいいがかりをつけられる不合理な世相。宮殿から追出された康順子と義理の子康大力が茶館に転りこんでくる。

結納金が足りず、二人で一人の妻を娶ろうと女衞にはかる逃亡兵二人。私服に目をつけられて、銀貨で買収し、二人はかろうじて命は助かるが、女衞は逃亡兵の身替りになって殺される。

第3幕（第2次大戦終結後、国民党軍とアメリカ駐留軍の横行する時代）

王利発と息子夫婦に孫娘、食糧不足でうどんもろくに食べられない状態。第2幕に登場した康大力はすでに八路軍ゲリラ地区に入っている。国民党政府の高官と結託する。女衞の二代目、人相見の二代目はどちらも裕泰茶館のとりを企んでいる。老いた常四爺、日本と国民党に財産を取られてしまった秦仲義、茶館の主人王利発ら三人は国を愛し真剣に生きてきたにも拘らず悲運に終る一生を嘆き、紙銭をまいて自らを葬わり別れてゆく。国民党高官が茶館の接収に到着すると、王利発が首を吊った報告が入る。

中間に康順子は大力の後を追ひ八路軍地区へ脱出し、康大力の身柄引渡しを迫る特務の脅迫を受けて王利発は息子夫婦と孫娘を八路軍地区へ脱出させる場面が入る。

皇帝復活を企てる宗教結社の女。ストの教員、それを追う特務、食いあぶれた芸人、板前、アメリカ軍の横流れ品を売る小間物行商人等が次から次へ登場しては消えてゆく。

ところで、茶館とは中国の旧式な喫茶店であって、客は茶の葉を持参し、熱湯だけもらってもよい。2時間でも3時間でもねばって談笑する市井の情報交換の場であった。故に茶館にはいろいろな人間が出入りし、この戯曲のように数々の人物を登場させ、多くの断片的な事件を重ねても矛盾が起らないのであって、老舎は茶館を圧縮された一つの小社会に見立てたのである。こうした舞台の設定からしてこの戯曲は人の意表をつくものがあつた。

はじめ老舎は《人民代表》という戯曲を書きあげたが、気に入らず破棄した。その一部分を生かして《茶館》第1幕に用いたとのべている注7)。1954年9月20日中国第一回全国人民代表大会に老舎は北京代表として参加している注8)から、それが《人民代表》執筆のきっかけとなったのかもしれない。《茶館》のあら筋は上記に述べたが、次にこの戯曲の特色を分析してみたい。

1. 一貫したストーリーをもたず、王利発を全幕に登場させて軸とし、旗人の常四爺、元宦官の妻康順子、民族資本家の秦仲義らを次に重要な副軸とし、茶館の客や、出入りす

る多彩な人物の吐くせりふによって事象を積み重ね、三つの幕にそれぞれの時代の世相風俗を映し出している。例えば第3幕に康順子が義子を追って茶館から去るが、義子は登場しない。読者は康順子のせりふで義子がゲリラ地区にいるのを理解するのである。

このような技法について、老舎はかなり自信があった注9)。「茶館は色々の人物の出入り可能な場所であり、それが舞台に選んだ理由であり、自分には政治のことがよく解っているとは限らないので、小人物ばかりで構成した」と説明し、「技法には多少なりとも新しい試みを行っているのであって、いつも古い技法に縛られているとはいえない」とのべている注10)。私たち外国人からみるとこの説明は不必要に感じられるが、中国では自身の作品についてこのような説明を行うことも必要な場合があることを私たち外国人は理解しておかねばならない。

2. 過去の社会の事象をあつかっている。老舎自身の説明を借りれば、過去の陰惨な社会、人民の苦しい生活を描き、今日自分たちの生活する社会環境と比較し、今日の政治、社会の良さを理解するのである。《茶館》を発表した当時は、歴史劇は別として、解放前の旧社会だけを舞台とする戯曲は少なかった。老舎のそのほかの戯曲は《神拳》を除いてみな解放後の新しい事象をあつかっていることは前に述べた。《茶館》において老舎が過去の社会を描いて、来るべき新しい社会への期待や到来の予告を端役、脇役のせりふで側面的にあるいは言外に含む表現で示そうとした技法は新しい試みといえる。この点について老舎は党政府の“百花齊放”の方針に従って《茶館》を書いたのだとのべている注11)。

3. 悲劇的終局で劇が終ることである。第3幕の終りに、茶館の主人王利発と常四爺、秦仲義の3人が自分たちの葬式の場面を演じ、演じ終ると笑い声を立てて別れて行く。その笑い声は自分らを自身の手で葬ることにより過去の惨めな生活、暗い時代への決別を示すと同時に、過去の生活に対する嘲笑を表現したという推測が成立する。だから悲しい形態をとる諷刺劇と解することもできる。一方では国を愛し懸命に生きる努力を重ねてきたにもかかわらず、悲惨な一生を終えねばならない悲しみを托して、落ぶれた境遇の者同志が語りあったという心の温みを素直に笑ったのであろうと解釈することも可能である。笑いについての解釈のしかたは読者にまかされているといえよう。

しかし、別れるとその直後王利発は首を吊って自らの命を絶つ。彼は友人らに再会する前、息子夫婦や孫娘と別れる時に已に死を心に決めていたようである。いずれにしろ彼の茶館は国民党高官の接収という悲しい結末で終わっている。このような構成は解放後の中国の社会観念から見れば異質に類するといえる。一定の政治路線に制約を受ける社会体制の違いを考慮にいれなければならない。

この2、3年、諷刺劇の運命は悲劇より少しましなようだ。かつてソ聯が諷刺劇の作品と理論を紹介してくれたが、私たち自身も若干諷刺劇を作ってきた。観衆の反応から見れば、人々は諷刺劇のほうが好きなようである注12)。

と先ず前置し、悲劇注13)についてさらにいう。

悲劇についていうなら、誠に悲しむべきである。誰も書こうとする人がいないし、どのように書いたらよいか、あるいは悲劇を書いてもよいかどうかすら討論にのせられていない。

これからの悲劇は人が（悪い人ではなく）環境とか時代とテンポが合わない。人と人

との性格の差や意志、願望のちがいからくる逃れがたい悲劇である。

今日私たちはこの方法で悲劇を書いてもかまわないだろうか。私たちはこのことについてまだ討論したことがない。だが、討論したことがないだけであって、討論するべきがないわけではない。

非常に遠慮深い表現で、悲劇形式の作品を試みる提言を行っている。

毛首席が人民内部の矛盾をいかに処理すべきかについて指示してくれた注14)。私たち作家は、その指示に従って、悲劇形式で書いてはいけないのだろうか。急には自分自身で解答を見出せないのだから諸君に教えてもらいたい。

この小論文、1957年3月18日付人民日報にのったもので、《茶館》発表（同年7月）の少し前である。小論の中では《茶館》と特定はしておらず一般論としてのべられているが何か戯曲の形式について新しい試みをしようとしていたことは理解できる。では、形式の変化を試みようとする考えはどこからきたのであろうか。

1956年、バーナード・ショー生誕百年を記念し、《蕭伯納戯劇集》（北京人民出版社）が刊行された。老舎はこの中で“*The Apple Cart*”を翻訳している。“*The Apple Cart*”は政治狂想曲と副題し、国王マグナスと労働党内閣の対決で、国王が勝つ形で終るが、ほんとうの結末は読者が民主主義による政治のありかたについて考えねばならない政治劇である。悲劇と直接的な関連はないが、この翻訳の仕事を通して、新劇に対する新しい構想を得たのではないかと推測する。老舎は1943年小説《火葬》の自序でショーにふれており、「戯劇語言」注15)と題する小論で、人物の性格化について、ショーの戯曲のせりふに表れる才能の華かさにひかれると語っている。英文ペンネームを‘*Lao Shaw*’とするのもショーの名に因んだのであろう。外国の戯曲の影響はほかにも見られる。

第1幕、女衞でも何でもする仲介屋が英国時計を旗人に売る場面がある。また、第3幕の最後に王利発の首吊りを第三者のせりふで知らせる。これらはゴーリキの《どん底》の第1幕と最終幕の最後を思わせるものであり、恐らく《どん底》にヒントを得たと思われる。

4. 民間芸能を新劇に取り入れたことである。第1幕の開幕前、各幕間、最終幕の閉幕後に乞食芸人老楊が登場し‘数来宝’を唱い、その歌詞の中で梗概をのべるとともにやがて解放の光明が到来するであろうことを暗示している。“数来宝”はそもそも門付歌に類する民間芸能であった。解放後、羅常培らと盲人芸能隊を組織し、以後民間芸能いわゆる“曲芸”の振興に力を注いできた。老舎自身多くの曲芸作品を残しているから新劇と数来宝のような民間芸能を結合させるのは彼らしい当然の試みといえる。ただし《収穫》に発表した時は数来宝は付いておらず、単行本（1958、戯曲出版）になってから付録としてつけられた。「幕と幕の間の空白をうめ、休憩時間を気にしないですむようにさせる。同時に梗概を知ってもらうのだ」と説明をしているが、たんなる埋め草的に付録としたのではなく、むしろ各幕の序と、エピローグとして意図したものであって、従来の上演形式に変化をつける試みであったことは明白である。“*The Apple Cart*”には長文の序がついており、ショーの戯曲はほかの作品にも長文の序をつけたものが多いから、その形式にヒントを得たと考えられる。

## 4.

《茶館》の形式と内容は従来の老舎の戯曲とは趣きの異なる作品であり、それは以上にのべてきたように老舎の新しい試みによるものである。ことに悲劇的な形を採り入れたことは、当時百花齊放の方針が出されていたにせよ、試みというより冒険に近い。過去三回の公演でもっとも人気を博したのは文革後 1979 年の三回目の上演であった。老舎は文化大革命の初期 1966 年紅衛兵の迫害に遭い不幸な死を遂げた。最後に家を出る時、三歳の孫娘の手を取り、「おじいちゃんにさよならをいいい」といったという注<sup>16)</sup>が《茶館》の王利発が孫娘を脱出させる場面を彷彿させるものがある。老舎の長編小説《四世同堂》の天佑老人は些細な事から日本人に難癖をつけられ、「私は奸商だ」と叫びつつ街を引き廻された。その恥辱に河に身を投げて死ぬ。この作者老舎の遺体も北京の西の太平湖の岸で発見された。この秀れた作家は自らの運命を《茶館》を書いた時すでに感じとっていたのかも知れない。

## 注

- 1) 《老舎写作生涯》 p. 247 「新社会就是一座大学校」の一文による。  
この文の冒頭に  
「私に司馬遷や班固のような文才があったとしても、過去一年間には書きつくせない程新しい人物、新しい事物があった。筆を手にして、近づく国慶節のために書くべき新社会への称賛の言葉を何度も考えた。私は愛す、この新しい社会を愛する。だが何を語ろうか、過去一年は毎日が、毎時間が、すべて私を興奮させ、感激の声をあげさせるような事の連続であった。どれをとりあげればよいのだろう」  
とのべ、帰国後の強烈な印象を打ちあげている。
- 2) 《老舎論劇》 p. 179 「我怎么写的《春华秋实》劇本」。老舎は五反運動に参加して題材を得たとのべている。
- 3) 《老舎的話劇芸術》 p. 65 「毛主席给了我新的文芸生命」(1952, 5, 21 人民日報原載)
- 4) 《老舎劇作選》 自序 (人民文学出版社, 1978)
- 5) 《老舎論創作》 p. 242 「熱愛今天」
- 6) 《中国当代文学史初稿》 下, p. 78.
- 7) 《老舎論劇》 p. 37 「語言, 人物, 戲劇」
- 8) 《四世同堂》 下冊 p. 456 (学習研究社, 《老舎小説全集》 10 卷所収「老舎年譜」) による。
- 9) 《老舎論劇》 p. 6 「戲劇語言」の中で、「問題を説明したり場面の転換をはかるには對話に頼るよりほかない。この時こそあらゆる考えをこらしてうまい對話を考えるべきである。」と、その人物にしか出せないいいかたを考えるべきことを主張し、「今日は天氣が、アハハ」というようなせりふにしても、その人物の性格が打てば響くように明確に出てこなければならぬことを説明している。  
《茶館》の第 1 幕は、一度に 20 人以上の人物を出したが、限られた時間の中で、この方法によって上演に際してかなり良い効果をあげることができたと自信のほどを示す。
- 10) 《同上》 p. 201 「答復有關《茶館》的幾個問題」
- 11) 前項注に同じ。
- 12) 《老舎論劇》 p. 78 「論悲劇」
- 13) ここでいう悲劇は人の死、あるいは悲しい結果で終るという意味に使われている。
- 14) 1957 年 2 月 27 日毛沢東は最高國務會議で「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題して演説。6 月 18 日公表された。
- 15) 《老舎論劇》 p. 1.
- 16) 《收穫》 1985, 4 期, 「父親最後の兩天」舒乙, (舒乙は老舎の子息である)

(昭和 61 年 1 月 28 日受理)